

内陸の〈水一人〉関係再考—河川湖沼と人間の相互関係から新たなユーラシア地域研究枠組みを探る

日時：2018年1月7日(日) 13:00~19:00

場所：東北大学川内キャンパス 川北合同研究棟4F 436室

主催：地域研究コンソーシアム(JCAS)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

共催：東北大学東北アジア研究センター

「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」

企画責任者：大石侑香

WS参加者：

報告者・コメンテーター9名

アドヴァイザー 高倉浩樹教授(東北大学)

傍聴者24名

報告：

セッション1では、農耕や牧畜を主とする内陸地域における漁業の柔軟な機能に注目し、井上は乾燥地域から、阿部は湿潤地域から社会・環境変化に対するミクロ適応を論じた。

セッション2では、国境や民族を越えるという河川・湖の特徴に注目し、人々と国家・企業等との間のポリティクスについて議論した。地田はアラル海漁業のスケールの政治、左近は国際河川をめぐる国家間関係、Byambajavは地下資源開発による河川汚染問題を検証した。

セッション3では、地理的境界である河川と小規模集団内外の社会関係に注目し、大石は漁撈技術の変化による社会関係等の変化、杉本はルーマニア農村の谷川とコミュニティ・アイデンティティの関係性を論じた。

総合討論では、近藤がアラスカ・人類学研究、伊藤がアフリカ・地理学研究の視点からコメントし、ユーラシア内水面域の諸特徴を抽出した。

プログラム：

趣旨説明 大石侑香(日本学術振興会・東北大学)

Sess.1 内水面漁業と社会・環境適応

井上岳彦(日本学術振興会・東北大学)

「漁撈は牧畜民を救う：1920年代カルムイク草原の大飢饉」

阿部朋恒(首都大学東京大学院)

「山の民の食卓：中国雲南省ハニ族の棚田における水田漁撈と水生生物利用」

Sess.2 越境する内水面域のポリティクス

地田徹朗(名古屋外国語大学)

「災害復興と小アラル海漁業の持続可能性」

左近幸村(新潟大学)

「第一次世界大戦へ流れる川：ドナウ川とロシア帝国」

Dalaibuyan Byambajav(日本学術振興会・東北大学)

“Mining and impacts on Mongolian rivers: socio-cultural dimensions”

Sess.3 内陸河川がつなぐ／わける社会

大石侑香

「モーターボート・レボリューション：西シベリア・ハンティの川筋集団と協働実践の変容」

杉本 敦(国立民族学博物館)

「トランシルヴァニア山村における谷川とコミュニティの形成」

総合討論

コメント：伊藤千尋(広島女学院大学)：アフリカ・地理学より

近藤祉秋(北海道大学)：アラスカ・人類学より